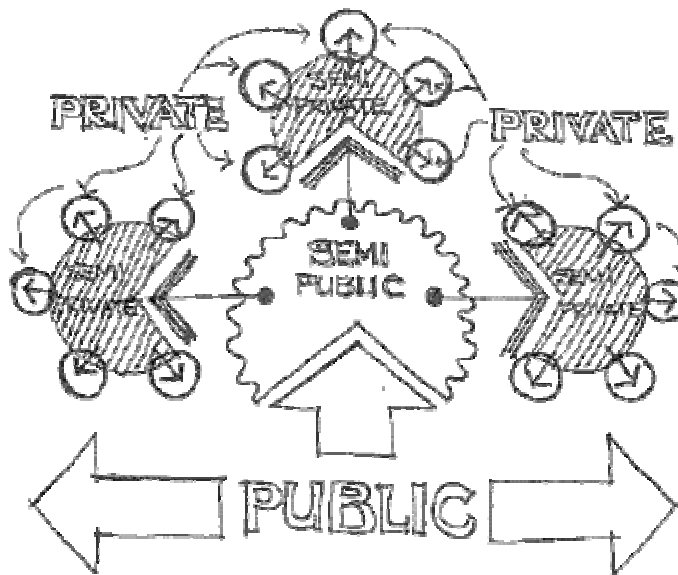


建築と防犯 Architecture and crime prevention

1 . 環境の防犯設計理論

1) ニューマン (Newman, 1972) Diffensible Space: 守りやすい空間

- (1) 領域性 (territoriality)
 - ・テリトリーの階層化(public---private)
 - ・分節化、マーカの明確化
 - ・メンテナンス、空間に対する支配
- (2) 自然監視 (natural surveillance)
 - ・住民の視線
 - ・高層化の問題 (EV、Open Space)
- (3) 敷地周辺の環境
 - ・利便性と環境



2) ジェフレイ (Jeffrey, 1971):

著書『環境デザインを通した防犯』(Crime Prevention Through Environmental Design)
を原点とする考え方は CEPTED (セブテッド) と呼ばれ、欧米で広く知られ実践されている。ニューマンの原則が、その主眼を建築空間、とりわけ集合住宅における犯罪抑止のための物理的なデザインのガイドラインを示すことに置かれていたのに対して、この
CEPTED の考え方はより広域の防犯を視野入れ、場所に付随した領域性よりもメンテナンスなど人が防犯的な状況を作る行動を重視している点で異なる。監視については、ニューマンが窓の配置などの物理的要素を考慮した自然監視を強調したのに対して、ガードマンなどによる組織的な監視やテレビカメラなどによる機械監視の有効性を挙げている。また時間的に変化する場所の状況、つまり空間だけでは決まらない要因を指摘し、適切な空間利用のスケジュールの重要性や空間的な距離によって孤立する状況を防ぐためにコミュニ

ケーションの有効性などを示した。今日では、携帯電話など大変手軽にコミュニケーションによる防犯が実現されつつある。

3) クラーク (Clarke, 1992): 状況的犯罪予防 (Situational Crime Prevention)

状況的犯罪予防は特定の場所 (近隣) での特定の犯罪に対する戦術的な防犯を目指すもので、基本的に犯罪者の「日常行動理論」と「合理的選択理論」をベースにしている。この環境犯罪学 (Environmental Criminology) は広域の都市における犯罪発生の地理的要因 (経路やパターン) を扱い、従来の犯罪学がそうであったように、犯罪者個人の一般的な心理学的、社会文化的背景や動機に原因を求めるのではなく、つまり誰が犯罪を起こすかではなく、犯罪はいつどこで起きるのかに関心を向ける。

・「日常行動理論」

日常行動理論は、犯罪者も私たちと同様に日常的なスケジュールの中で行動していて、その中で犯行対象を見付けていると考える。したがって、犯罪者の行動圏によって、犯行場所の地理的な分布や犯行頻度のパターン、犯罪者が好んで利用する特定の施設との隣接性、犯行の時間的特性などを読むことができる。これによって場所の利用スケジュールを適切にすれば犯罪者との接触を避け、犯罪による被害を回避することができる。

・「合理的選択理論」

合理的選択理論は、犯罪者がある状況下で犯行に及ぶか否かは、それによって得られる利益とコスト (リスク) とを天秤に掛けて判断していると考えられる。したがって、たとえば自動販売機などに多くの現金を残さないようにプリペイドカード化を進めて盗みで得られる利益を減らし、防御を堅牢にして犯行に必要な労力を増やし、監視カメラを設置して逮捕のリスクを増やすことが犯罪防止に効果があることになる。

住居侵入者の合理的な判断プロセスを考えれば、出入りの制御 (access control) が重要である。既に述べたテリトリーの目印 (マーカー) の明示による心理的、象徴的な障害物 (バリア) を設け、さらに物理的なバリアによって侵入を防ぐ。その極端な例がアメリカの南部、南西部で近年見られる町全体を要塞のように囲ってしまうゲート・コミュニティである。

4) 環境の防犯設計理論に対する疑問

- ・ 自然監視・機械監視によるプライバシーの侵害に対する批判
- ・ 自然監視の邪魔になるとして切られる公園や街路の樹木 景観破壊
- ・ 犯罪転移の問題 ある建物や町が防犯的になれば、犯罪者は別のターゲットを探すだけで、総量としての犯罪数は減らないという批判

2. 日本における事例研究

3. 集合住宅の安全計画